出会い

第６号
発行：大念寺
小矢部市中央町 1-34
TEL0766(67)1260

「鶴は千年、亀は万年」

大念寺住職　小林照人

お正月に因みお目出度い話題から始めさせていただきます。

鶴亀は古来縁起のよい動物として人々に親しまれ、謡曲や長唄にも「亀は万年の齢（よわい）を経、鶴は千代をやかさぬらん…」と謡われております。

亀は一般的に長生きで、或る種の亀は陸生動物の中で最長の二百年以上生きるものも在り「亀は万年」と言われて来たこともいわれの無い事ではないようです。

逆に寿命の短いもののトップは鼠で二年、二十日鼠は一年余りしか生きられないようです。長寿の動物には共通した幾つかの要件が挙げられておりますが中でも呼吸回数と命の長短が深く関わっている事は間違いないようです。言うまでもなく動物は酸素無しではいきられません。酸素は呼吸によって体内に取り入れられますが呼吸の回数は動物によって大きな差が有ります（酸素は水や食物からも取り入れられています）。

人間は一分間に一六回～一八回（成人）、亀は二～三回鼠は二〇回、と言われておりゆったりと深い呼吸をすることが健康と長寿につながっているように思われます。

体内の酸素不足が現代人の体調不良や病気の原因になっている場合が多いことは以前から指摘されて来ました。

酸素不足の原因としては自然環境（大気汚染）や住宅環境（建物の高気密化）等もありますが、直接的な原因として車社会による運動不足、多忙、ストレス等生活環境の変化により呼吸が速く浅くなって来ていることが指摘されております。

私達は誰もが酸素に取り囲まれて生きておりながら自分の所為(せい)でその酸素を十分に取り入れられていないとしたらこんな勿体ないことはありません。病原菌の多くは嫌気性菌で酸素を嫌い、ガン細胞も菌ではありませんが酸素の中では元気を出せないと言われています。

一日の中に一回でも二回でも一生懸命頑張っている細胞のことを思い出して深い呼吸で酸素を身体の隅々まで送り届け今年も元気で過ごしたいと願っております。

法然上人
浄土宗
開宗850年
お念佛からはじまる幸せ
令和6年

浄土宗の仏事について③「位牌」について

通夜、葬儀で用いた白木の位牌は、四十九日の満中陰でお寺に納め、黒塗りや金箔を貼った本位牌に改めます。

通常は故人一人に対して一つの位牌をつくり、表には戒名だけか、亡くなられた年月日を併記します。二霊彫りといって、夫婦の二人の戒名を一つの位牌に並べるケースもあります。古い先祖の位牌が多くなると「〇〇家先祖代々」と彫られた位牌に託して拝む場合もあります。

また、俗に繰り出し位牌といって屋根と扉のついた入れ物に位牌を複数枚入れ、命日に合わせて繰り出し拝むものもあります。さらに古くからの多くの戒名を記すために過去帳（霊簿ともいう）に、故人の戒名、俗名、命日、享年を残す場合もあります。

位牌を新しくしたり、修理したりする場合は、お寺にお願いして発遣（はっけん＝お性根抜き）をしてもらってから、新しいものが来たら開眼（かいげん＝お性根入れ）をしてもらいます。

過去帳

繰り出し位牌

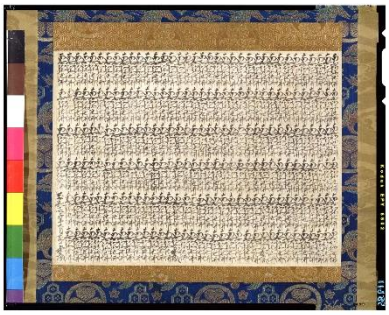
徳川家康の浄土信仰

「厭離穢土（おんりえど）　欣求浄土（ごんぐじょうど）」

桶狭間の合戦後に家康が逃げ込んだ、代々の菩提寺である岡崎の大樹寺で自害をしようとした際に、住職の登誉（とうよ）上人から止められ思い止まります。そして、上人から「厭離穢土欣求浄土」（穢れたこの世を離れ、浄土に往生することを願い求める）という浄土教の言葉を授かり、以降、旗印にしたとされています。

時は戦国、民衆は苦しめられるばかり。当時十九歳だった家康は、いつか自分こそがこの戦を終わらせ、平和な世界を築きたいと強く願い、奮起したのではないでしょうか。

本来の意味とは少し異なりますが、「穢れたこの世を浄土にすることをめざせ！」という行動指針は、組織の士気を高めることに大きな役割を果たしたことでしょう。



家康の写経（東京国立博物館蔵）

家康は晩年、自身の懺悔やこれまで命を落としていった者への供養の思いから、毎日「南無阿弥陀仏」と念仏を称え、写経をしていたということです。昨年のＮＨＫ大河ドラマ「どうする家康」の中では、大阪の陣以降のシーンで写経のシーンが度々登場していました（大樹寺や徳川美術館に残されています）。この想いは正に、本来の「厭離穢土欣求浄土」の意味である「ただただ極楽浄土へお救い下さい。阿弥陀様お願いします」という全ての者に対する心からの追善の願いだったはずです。

大念寺の仏さま紹介 ④

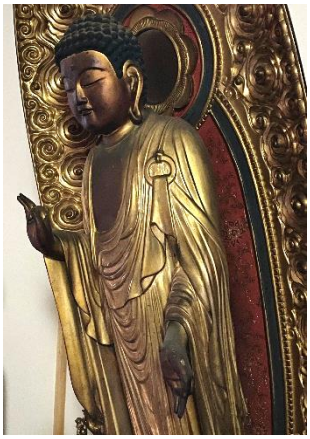
前・ご本尊　阿弥陀如来立像

古くから後堂に鎮座しおられる先代のご本尊です。昔の本堂はおよそ二百年前の建築物でしたが、果たしてその時のご本尊だったのか？途中から現在の座像に交代したのか？謎なのです。本体の台座あたりは剥がれてきており相当に傷んでいます。しかし、そのお姿はかつて本尊として祀られていただけあって品格、凛々しさを感じます。

浄土宗、真宗寺院のご本尊を見渡すと立像が多いようです。立像は人々を救済しようと立ち上がったお姿だと考えられています。実は時代と共に立像が増えていくのですが、これは人々の不安が増した時代背景により、人々の『救いにきて欲しい』との願望の表れだといわれております。

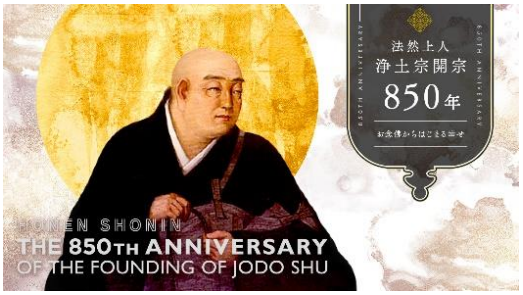
両手に来迎印を結び、前傾して今まさに臨終者を迎えに来る様子を表わしています。指で作った輪は、仏様の光、さえぎられることのない智慧の光を表しています。

「上求菩提下化衆生」自らは成仏を求め向上しつつ、一方では広く衆生を教化して仏道に導くことを表しているとされます。俗に「さあ、おいで」と人々を救いとるＯＫサインとも言われています。



今年は浄土宗開宗 850 年！本山に参拝する絶好の機会

令和６年は法然上人が浄土宗を開かれて 850 年の記念すべき年です。団体参拝も計画されていますが、３月には新幹線も開通し京都がより身近になります。節目の年に総本山に足を運ばれるのもよろしいかと思います。



編集後記

第六号発行までの間が少し開いてしまいました。ただ、年の始まりは一月から発行したかったという思いもあります。年始は「今年の抱負」と題して一年の目標を新たに立てる方も多いと思います。人にはより向上したいという素晴らしい欲求があります。この「願い」が起こったならば、是非、文字にして、そして言葉として声に出してみましょう。日々声に出すことは行動を後押しします。お念仏にも通じることと思います。

【副住職　小林和宏】